



尾瀬が原高層湿原 東西5軒、南北2軒に亘り、東に極、西に至る遷移相として、イヌブナ・シナノキ等が見られる。中禪寺湖畔に達するとブナの大木が多く、ハルニレの巨木も混生して代表的なブナ帯を示している。戦場ヶ原から湯元温泉附近はシラカシバ帯の標式的なもので、六、七月の頃にはカラマツとの混交林の下木としてレンゲツツジが燃える花盛を見せて壯觀である。前白根山の頂上近くハイマツ帯の間はシラネアオイ・ハクサンチドリ・ベニバナイチャクソウ等高山植物で美しく飾られ、太郎山上と共に花畠が立派である。高山植物は男体山・女峰・赤雞連峰と共に、尾瀬地帯では燧岳・至仏山等にもオゼソウのような珍しいものがある。最後にこの公園として特に誇るべきものは高層湿原帶の発達であつて、戦場ヶ原・小田代原にも見られるが、鬼怒沼・富士見平・菖蒲平等の湿原帯があり、尾瀬ヶ原に至つてその真価は極度に發揮され、四圍の山容と共に比類のない湿原風景を呈している。又中禪寺坂を登りつめる辺にミズナラ・アカカンバに交つてダケモミ等の針葉樹が見られるが、菖蒲ヶ浜に到る湖畔には漸く多く、白根沢の森林帯ではコメツガも加わつてヒロハカツラ・ダケカンバと共に喬木林をなしている。更に金精峠道のオモリトドマツ林に至つては、いよいよ深山の感を深くさせる。尾瀬地方の天然林も日光地方に比べて遜色のない林相を示して、その優れた原始景観を飾つている。

三一四、藍色湖である。

次に気候と火山作用による土壤の変化に基く、豊富な樹種や変化に富む植生がこの公園の優秀な植物景観を形造つている。その垂直的分布は極めて標式的で、クリ帯・ブナ帯・シラカンバ帯・ハイマツ帯等の特徴がよく觀察される。日光地帯では山内から田母沢・裏見滝・丹勢山を経て馬返に至る間、凡そ海拔高で六〇〇

動物としてはツキノワグマ・ヤマイタチ・エチゴウサギ等が見られた原始景観を飾つている。

られ、尾瀬の景鶴山一帯にはカモシカが群棲し、日光地方では鹿が相當蕃殖している。鳥類の珍しいものとしては、北方の候鳥であるカルガモが尾瀬地方に群棲蕃殖し、ダイサギは尾瀬沼附近に七月頃渡来して九月頃帰去する外、鳴禽類に至つては尾瀬・日光両地方を通じると三十種以上も見られる小鳥の楽園である。又ヘコネサンショウウオ・ニッコウカスミサンショウウオ等の両棲類が群棲し、昆虫類はお花畠が豊富な為特に多種多様で、ノンネママイ・ベニヒカゲ・フジミドリシジミ等の高山蝶が至仏山に見られ、特に尾瀬ヶ原は蜻蛉類の饒産で著名であるが、その中でもハフチョウツボ・オオトラフトンボ等は珍種である。なお陸産貝類にもオゼマイマイ・オゼヒダリマキマイ等の珍種がある。又檜枝岐小屋附近で珍しいコテンングコウモリが見られる。

那須・塙原・鬼怒川地帶

この地帯の主要部は那須ヶ岳、高原火山等の火山群と、甲子^{カツチ}・那須・塙原・鬼怒川・川治等の温泉群である。那須火山の基盤は黒雲母花崗岩と第三紀の流紋巖灰岩・浮石・頁岩・砂岩・巖灰質砂岩及び流紋岩の熔岩等であつて、その上に石英安山岩からなるトロイデの古期火山と、安山岩からなる主としてコニーテの新規火山とが成立した。そこへ高原火山の先駆となつた流紋岩の熔岩流が相当広範囲に流出し、その上に各種輝石安山岩で構成された高原火山が成立した。その間に生じた陥没地に集塊岩流と熔岩流とで堰止めた一時的の湖水が成生し、その堆積物である洪積世の湖成層には、淡水産貝類化石や木の葉石として有名な塙原植物化

石層群を含んでいる。

那須高原は概ね牧場景観の草生地であるがレンゲツツジの大群落が諸所に見られる。那珂川の上流奥地ではコメツガ・トウヒ等の針葉樹が多く、低地部はブナ・ミズナラ・カエデ類等の落葉広葉樹の広大な原始林に被われている。高原山一帯は針葉樹と広葉樹の混交した林相を示し、八方ヶ原では白樺の疎林の下木としてレンゲツツジ・ゴヨウツツジ等の花木が美しく、附近は新緑・紅葉共に優れている。

この地帯は景觀上から(一)、那須岳と那珂川上流の一帯、(二)、高原山と簾川とを挟む塙原温泉群の一帯、(三)、川治・鬼怒川温泉と湯西川・栗山郷の一帯、(四)、庚申山の一帯、(五)、甲子温泉一帯の五団地にわけて考えることが出来る。(一)の地区は広大な那須原野の一角に聳える茶臼山(一九一七メートル)を盟主として那須五岳が雄大な山容を示し、隨所に点在する落葉灌木とレンゲツツジの群落に修飾され、日光・奥日光・尾瀬地帯に見られない明朗広闊な景觀を味わうことが出来る。那珂川上流一帯の山岳地帯は未開発で、その原始林は奥日光に劣らぬものである。古來名湯として知られる那須十二湯に加えて、近代的な十八ホールのゴルフ場がある。(二)の地区は簾川周辺の渓谷美・森林美が良く保護されており溪谷にはイワナ・ヤマメ等生育し、塙原温泉の保健・休養度を高めている。(三)の地区は鬼怒川の上流男鹿川・湯西川の渓谷一帯であるが現在森林が荒廃し、適當の保護が必要である。男鹿川の發電計画による五十里^{メートル}のダムは既に建設に着手しているが、往古存

在した五十里湖の復元であり、環境を修景すれば風致上は却つて現在の荒廃した景観の補修となろう。又この地区には泉量の豊富な温泉群がある。この地区は集塊岩風景及び天然記念物庚申草の自生地として知られる庚申山を中心として、旧公園地帯の錫ヶ岳に続く^{スカイ}皇海山一帯である。この地区は福島県地内であつて、阿武隈川の源流である。渓谷美と那須火山の裾野である広広とした牧場景観の地帯、並びに甲子温泉地帯、更に甲子峠から三本槍岳（一、九一五メートル）へ至る稜線の西側にある風致保安林地帯である。この地帯の特色となる山岳・渓谷・温泉は次の通りである。

那須岳—所謂那須火山脈の盟主で、主峰茶臼山（一、九一七メートル）は今なお噴煙をあげている。古来数多の大爆発により、山頂部は岩石磊々たる火山岩的な風貌を呈し、山腹は広大なる高原を展開し、落葉広葉樹林・レンゲツツジ等の植生が見られ、裾野は那須原野となり広大な眺望を有している。

高原山—高原火山群の盟主であり、山容は優美なコニードをなし、主峰秋迦ヶ岳（一、七九五メートル）のほか數峰に分れ、この間に八方ガ原のような白樺・レンゲツツジの高原美が各所に展開している。

庚申山—日光国立公園の南部巻巻丸火山群中の最高峰（一、九〇一メートル）で妙義式の集塊岩の山容と、山頂一帯の原始林及びこれが原産地である天然記念物庚申草とで著名である。鬼怒川渓谷—本渓谷中最も優れているのは川俣一野間間及び小指—鬼怒川温泉間で、前者は針葉樹に覆われた石英粗面岩渓谷、

後者は花崗岩の断崖が連続して、何れも豪壮な渓谷美を呈している。

磐川渓谷—俗に四十八瀧と称する大小多数の瀑布と針葉樹林の間に見られる落葉広葉樹の紅葉美は、塙原温泉の価値を高めるものである。

阿武隈渓谷—甲子温泉に至る阿武隈川の上流であるが、真船牧場の北辺由井原を穿つ花崗岩の断崖は豪壮であり、剣桂、馬立附近の紅葉美と共に、福島県側の主要景観である。

塙原温泉群—磐川沿いに大網・福渡戸・塙釜・塙の湯・烟下戸・門前・古町・須巻・袖ヶ沢・新湯・元湯の十一ヶ所の温泉が点在し、泉質は概ね塙類泉で、湧出量豊富である。

鬼怒川温泉群—鬼怒川温泉は上流の川治温泉と共に単純泉である。湧出量は豊富といえどもが近代的施設は整つてある。上流の湯西川・川俣等の温泉は閑静な山の湯の静かな環境である。

那須温泉群—古来、名湯として知られる那須十二湯が、湯本・新那須・高雄股・大丸・弁天等山間各地に湧出し、多種の泉質・豊富な湧出量をもつてゐる。

甲子温泉—花崗岩の間隙から湧出する塙類泉で、温度は四五度程度であるが、湧出量豊富な山峡の温泉である。

日光は我国の国立公園の中で最も文化景観に富む国立公園である。日光の人文景観はいうまでもなく東照宮の建築で代表される。織細華麗なこの建築は日光の自然景観とはかけはなれたもの

のよう考へられやすいが、紅葉期の日光の自然をみると、東照宮の精巧な極彩色は矢張り自然と調和したものであることが理解される。日光こそ自然と人工が渾然と融合した珍らしい国立公園といつてよい。

日光が開かれたのは千百余年も昔のことと東照宮が出来る前に二荒山神社や輪王寺が出来上つていた。この地に東照宮を建立することになつたのは家康の遺志である。元和二年四月に家康が死去して、二代将軍の秀忠は十月から東照宮の造営に着手、翌三年三月竣工、十七日に靈を久能山からうつしたのである。この造営を「元和の造営」と呼んでいる。このときの東照宮の詳細についてははつきりしないが、東照宮はその後丁度二十年目の寛永十三年に三代将軍家光によつて所謂「寛永の造営」が完了し、このとき略現在の東照宮が出来上つた。「寛永の造営」は二十年目の改修というよりも改めて造営したものという方が適切である。この造営は寛永十一年の末から着手され十三年の春三月（一説には四月）に完成、僅か十五ヶ月位の短日月で竣工したのである。現在のあの誠細華麗な建物が一年余りで完成したのは驚嘆に値するが、建築工芸繪画の各部門に亘つて当代の代表的な人々が参加したもので、江戸時代初期の代表的な作品として貴重なものである。東照宮の建設に伴つて輪王寺や二荒山神社も改築され、その後三代將軍の大猷廟が造営され、こゝに所謂東照宮の人工美が完成した。

東照宮は老杉にかこまれて輪王寺や二荒山神社と同一の境内に

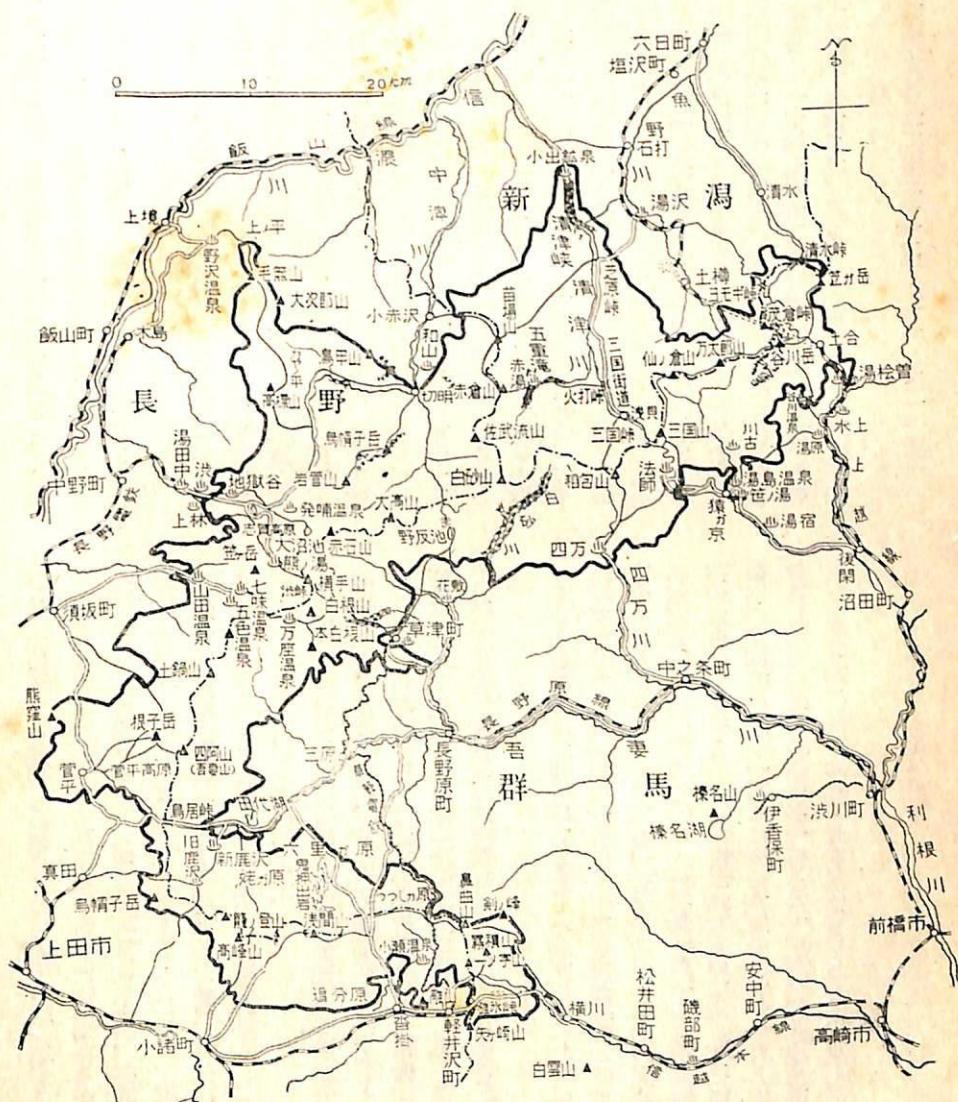
あり、比較的狭い地域に造営されたために自然の地形に制約されて左右均齊でなく、しかも東照宮は現在は神社であるが、建築の上からは神社と寺院との形式が全く混合し、本殿、拝殿、廻舎、神庫、水盤舎、鳥居などは神社建築であり、仁王門、五重塔、鼓樓、鐘樓、經堂、本地堂などは仏教建築である。神仏の混淆したものはすくなくないが、日光ほど沢山の両者の要素が巧みに交合して一体となつてゐる例は他にない。

中禅寺湖畔には二荒山神社があり歌ヶ浜には立木觀音があり湖尻の朱塗の橋などと共に、東照宮や神橋などと共通した日光獨得の景觀がみられる。中禅寺湖畔の利用拠点である中宮祠には日光的な特色がないが、奥日光の湯元温泉にはいると黒い色調に統一された旅館が何か輪王寺大猷廟などを連想させる味をもつている。

千古の秘境尾瀬一帯にはさすがに人文景觀のにおいがないが、近年拡張された那須塩原一帯には豊富な温泉集落と共に幾多の人文景觀が数えられる。中でも一番著名なのは明治の文豪尾崎紅葉が激賞した塩原、彼の名作「金色夜叉」の一部は塩原温泉の福渡戸の旅舎佐野屋後の清琴楼で書かれたものである。更にこの国立公園の東端部の那須一帯には金毛九尾の狐が化したといふ殺生石をはじめ扇の的の那須の一と/or/や、那須野ヶ原の源頼朝の巻狩など幾多の伝説と歴史で豊かな味をのこしている。

上信越高原国立公園

指定 昭和24(1949)年9月7日
面積 149,349陌



この国立公園は、名称の通り上野・信濃・越後の三国即ち群馬

・長野・新潟の三県に跨がる高原の地帯であるが、上越側は清水山塊として構造山地であるアルプス式風景が主体となり、上信側は浅間・白根両火山群と、志賀・菅平・浅間等の高原風景が特色である。区域の内外に亘つて多数の温泉があるが、その火山現象の外に山嶺地帯には高山植物や針広混交の原始林があつて、比較的寒地性要素を含んでおり、高原地帯ではシラカンベやカラマツの疎林の中に、レンゲツツジが美しく明るい色彩を添えている。

この地帯を地学的に見ると、清津川—白砂山—八間山の線を界して上越側と上信側とは東西異つた相貌を呈している。上越側の谷川岳から白砂山に至る一帯のうち、仙ノ倉山附近は第三紀御坂層（御坂層というのは富士山地方の御坂山塊の地層で各種の角礫岩・輝緑斑灰岩などを含む第三紀の海底火山噴出物の堆積層）を基底として、花崗岩や石英閃緑岩質の深成岩類が貫入したり併入したりしているが、茂倉岳の頂上部にはまだ相当の御坂層が残存している。三国峠・白砂山・野反池附近は殆んど御坂層ばかりである。苗場山は第四紀の噴出岩から出来ているアスピーテで、清津峡の東岸は主として御坂層、西岸は第四紀の噴出岩から成っている。北東部地帯は利根川や清津川の上流によつて可成り削剥され、壯年期のアルプス型地貌を呈している。上信側の岩背・四阿・浅間と続く山々は何れも第四紀の火山で、輝石安山岩を主とする熔岩・集塊岩・火山岩層・浮石等から出来ている。浅間山は幼年期のコニーデであるが、その他は概して開析の進んだ地形を呈し、

四阿山もコニーデである。

山嶺一帯に亘つて、高山植物や針広混交の原始的な美しさを呈しているが、この公園内で比較的よく見られる高山植物は、谷川岳附近のオセソウ・タニガワコザクラ、苗場山のミヤマホタルイ・サギスゲ等、白根山のコマクサ、浅間山附近のシャジクソウ・ミヤマコウゾリナ・アサマカンゾウ・アサマブドウ（クロマメノキ）等、菅平附近のエゾオオサンザシ、野反池畔のノソリホシクサ等があげられる。

我が国の高山昆虫で著名な地帯は大雪山・日本アルプス・大山等であるがそれ等と共に、浅間・白根から谷川連峰に亘るこの公園区域があげられる。その中でもここは種類が一番多いものと予想されている。浅間山一帯はペニヒカゲ・ヤマモンキチヨウ・ミヤマシロチヨウなどが代表的である。ペニヒカゲは多くの高山に棲息するが、浅間山のは独特な変種で珍らしい。三国山脈一帯にはペニヒカゲは云うまでもないが、中腹から山麓にかけて各種のシジミ類が多く、フジミドリシジミ・ウラクロシジミが代表的である。四万・法師温泉附近及び志賀高原は、日本で比較的少ないミドリシジミの棲息地として斯界に有名であり、谷川山麓の谷川温泉附近には珍しいスギタニルリシジミが棲息する。

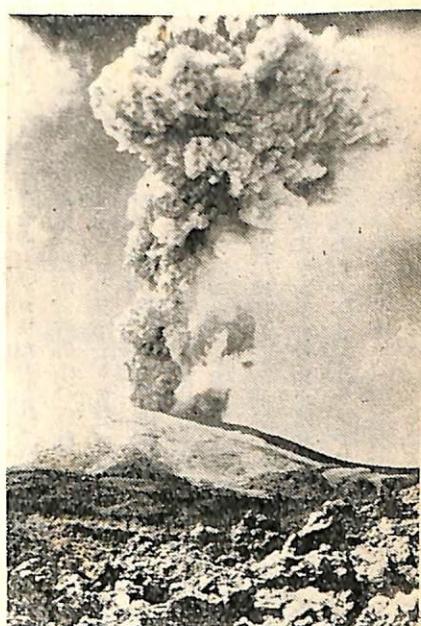
次にサンショウウオは我が国に十六種生存するが、その形態や生態の上からカスミサンショウウオ群（暖地性平地静水型）、ブチサンショウウオ群（山地溪流型）トウホクサンショウウオ群（寒地性平地静水型又は高地静水型）の三群に分けられている。この

三群の分布区域がこの公園内で相接しているので、多くの種類が生存していることは興味が深い。以上のよう自然景観の特色から見てこの公園は、上信火山高原地帯と上越構造山地帯とに分けて観察するのが便利である。

上信火山高原地帯

浅間山（二、五四二メートル）は浅間火山群の主であると共に我が国最高の活火山で、度々爆発を繰返しているが、地形に現われている大爆発は三回で、そのため三重式火口をもつコニードとなつてゐる。天明三年の大爆発の時には北方の六里ヶ原に向つて大熔岩流を押出し、巾二一・三糠、長さ約七糠に亘る鬼の押出しと称する荒原を形成した。この辺に散在する熔岩樹型は富士山麓の青木ヶ原のものと共に有名であるが、小鳥の繁殖地である点も共通しているので興味が深い。この辺の植生はカラマツ・ダケカンバの疎林で明朗な林相を呈しているのが特色で、六月頃その間のつつじが原にレンゲツツジが火の海の様に咲くのは壮观である。

白根山（二、一六二メートル）は本白根山（二、一七六メートル）と共に双子火山を形成しているが、更に横手山や米無山と一体となり、日光白根に対して草津白根と呼ばれている。本白根は円錐に近い形で針葉樹林に被われているが、白根は熔岩台地の集合で、山頂には長径約一粂的巨大な噴火口があり、その中に湯釜・涸釜・水釜



浅間山の爆発と鬼押出し 有史後も噴煙の絶えない火山として、浅間は阿蘇とともに代表的な火山である。しかも年に二三回はこのような大爆発を起して頗る壯觀である。近景に見える「鬼押出し」は有名な天明3年（1783）の大爆発によつて押出された六里が原熔岩流で、岩手山の焼走り熔岩流と好一対である。

の三つの爆発口を有し、中央の湯釜は熱湯を湛えて水蒸気と硫化水素を噴出している。白根火山の基底は玢岩・熔岩・第三紀層から成つており、噴出の中心は大体白根・本白根・横手の三ヶ所で、最初に凝灰岩及び集塊岩、次に米無・横手の二熔岩、最後に白根熔岩が噴出している。横手熔岩は流动性が大きく、末端まで緩傾斜の美しい斜面を作つており、その厚さも横手山では四〇〇メートルに達している。ところが白根熔岩は流动性に乏しく粘質で、側面や前面は急傾斜となり、所謂舞台地形を呈している。

四阿山（二、三三二メートル）は根子岳（二、一二八メートル）浦倉山（二〇九〇メートル）などを含む四阿火山の主峯で、北西には大爆発口がある。

岩菅山（二、二九五メートル）は裏岩菅山（一、三三九メートル）烏帽子山

(二、二三〇米)と共に山塊をなす第四紀の火山である。この連山はもともと一大火山の噴火壁の一部で、魚野川に面する南東面は火口の内壁ではないかと云われてゐるが、非常に開析が進んで想像するのは困難である。

山腹はトウヒ・シラビソ・コメツガ等の針葉樹に被われ、ミヤマハンノキやウラジロナ

ナカマド、更にチングルマ・ガンコウラン・ヘクサンイチゲ・ヘクサンチドリなどの高

山植物に彩られている。この地域にはカモシカが棲息し、猿の群なども見られる。

苗場山(二、一四五メートル)は魚野川を距てて岩膏山に対する信越国境のアスピーテ型の特色ある山で、一名幕山と称され、第四紀噴出岩から成っている。頂上の台地は約六〇〇メートルを有つて平均斜度十二分の一(標高一、八〇〇メートル、一〇〇メートル)で湿原を呈し、苗代と呼ばれる沼沢地であるが、スギ類が生育し、矮性の針葉樹がある。この頂上の台地は北アルプスの五

色ヶ原や雲の平よりは遙かに大きい。山腹はブナの原始林で被われてゐる。



谷川岳一の倉沢 谷川連峰は信越側の火山地帯とは異なり、第三紀御坂層を基底とし、これを貫き又は進入した石英閃緑岩や花崗岩類の構造山地で、清水岩塊と呼ばれ、侵蝕の相当進んだ壯年期の地貌である。標高は2000mに達しないいえども、アルプス的景観をもつてゐる。

上越構造山地帶
谷川連峰は清水山塊中山貌が最も豪壮な古褶曲山地で、群馬県側は急峻で絶壁が多く、高度は二、〇〇〇メートルに過ぎないが、一、三〇〇メートルの比高をもち、アルプス的な登山地として京浜から最も近いために、近年登山者の増加が目ざましい。連峰中の

主な山嶺は最高峯の仙の倉山(二、〇二六メートル)のほか谷川岳(一、九六三メートル)、谷川富士(一、九六〇メートル)、万太郎山(一、九五四メートル)、茂倉山(一、九七七メートル)などである。谷川岳は山麓の広葉樹林帶

から、針葉樹林帯を欠いて一足飛びに灌木帯に移るのが特色である。仙の倉山をはじめとしてこの連峯の山頂一帯は、シャクナゲやハイマツと共にハクサンイチゲ・ナンキンコザクラ・イワカガミ・タニガワコザクラ・ムシトリスミレ等の群落で美しく色彩られている。殊に谷川岳附近には珍らしいオセソウの分布が見られる。

志賀高原は横手・白根の熔岩で出来た一、四〇〇メートル、七〇〇メートルの高原で、周辺には笠ヶ岳（二、〇七五メートル）横手山（二、〇三五メートル）志賀山（二、〇三五メートル）赤石山（二、一〇四メートル）焼額山（一、九六〇メートル）等がとりまいている。志賀山は近年渴状熔岩の地形を呈することが発見され、学界に新たな興味を投げている。

高原一帯に亘つて琵琶池・丸池・蓮池・大沼池等大小四〇余りの湖沼があり、堺浦・熊の湯等の温泉が湧出し、夏は避暑地・ハイキング・キャンピング、冬はスキー場として有名である。高原の湖沼・湿原地帯にはモウセンゴケ・ヒルムシロ・ムシトリゼキシヨウ・ヒメシヤクナゲ・ミツバオウレン・ミズバシヨウ・ヤナギラン・テガタチドリ等が生育し、夫々開花期には美しく高原を彩る。

菅平高原は四阿山の熔岩流で形成された雄大な高原で標高約一、三〇〇メートル、広さ一、〇〇〇陌を越え、一部の湿原には天然記念物ニツコウサンショウウオが棲息し、また最近これと同様な寒冷気候時代の残存動物トワダカラゲラが根子岳麓の湧水地帯から発見された。夏はキャンピング・ハイキングに、冬はスキー場と

して利用者が多く、日本ダボスの名がある。

軽井沢高原は南方荒船火山の北麓と浅間火山の南麓との間の窪地を、浅間山の迫分ヶ原泥流が千曲川の上流の湯川を堰止めた洪澗地で標高は九〇〇メートル、一、〇〇〇メートル、シラカンバ・カラマツの生育に適した高原である。国際的な避暑地として古くから著名であり、長期滞在の休養地として益々将来性が期待される。

碓氷峠は関東・信越を結ぶ主要交通路であるが、旧道の峠にある見晴台の展望は雄大で、附近一帯はカエデ類・ミズナラ・トチ・ヌルデ・ツタウルシ・ミツバツツジ等その他の紅葉樹種が豊富で秋の壯觀は見ものであり、古くからサンセツトボイントと称せられて国際間に著名である。

三国峠は越後と関東を結ぶ重要な交通路で三国山（一、六三六メートル）の南西にあり、海拔一、二四四メートルで碓氷峠と共に著名な峠である。

清津峡は清津川の一部で、柱状節理をした玢岩と堅緻な緑色凝灰岩とから出来た峡谷である。西岸の紅葉・新緑は美しい。

野反池は魚野川上流が八間山の裾で堰止められ、周囲約五糠の池をつくつてある。附近的湿地にはノゾリホシクサのほかニツコウシヤクナゲ・コケモモ・コイワカガミ等が群生し、高原状の緩傾斜面にはシラカンバ・カラマツ等の針広混交林が生育して美しい原始境をつくつてある。

上信越高原は人文的には最も新しい感覚をもつ国立公園であ

る。信濃に住んだ昔の人たちも上信越の山々よりはるかに高い

中部山岳の山々に神感を感じたのであらうか。この公園の中には三国峠の熊野権現や碓氷峠の熊野神社のように峠には著名的な神社があるが山頂のものは苗場山の伊米神社位のものであとには左程着目するようなものがすくないようである。山麓をとりまく幾多の温泉にからまる史蹟や伝説はすくなく、上信越の山岳は人間との交渉がすくなかつたらしい。というよりもむしろ上信越高原は近代的な文化的な交渉が著しく目につくのである。

軽井沢高原の開発が企てられたのは、我国の夏季の高温と高い湿度との悪条件をのがれようとした来朝外人の理想の実現で明治以後のことであつた。海拔千米に近く、しかも京浜に近いこの高原一帯は日本の気温に慣れない外人には勿論のこと、日本人にとっても理想的な避暑地でその後急激な発展を示したのである。菅平が日本のダボスとしてスキーで特に著名になつたのはシュナイダーが来朝してからである。菅平の北側を極端に低くした沢山の萱葺の農家がスキーヤーの宿泊のために増築されたのも永い歴史からみれば極めて最近のことである。

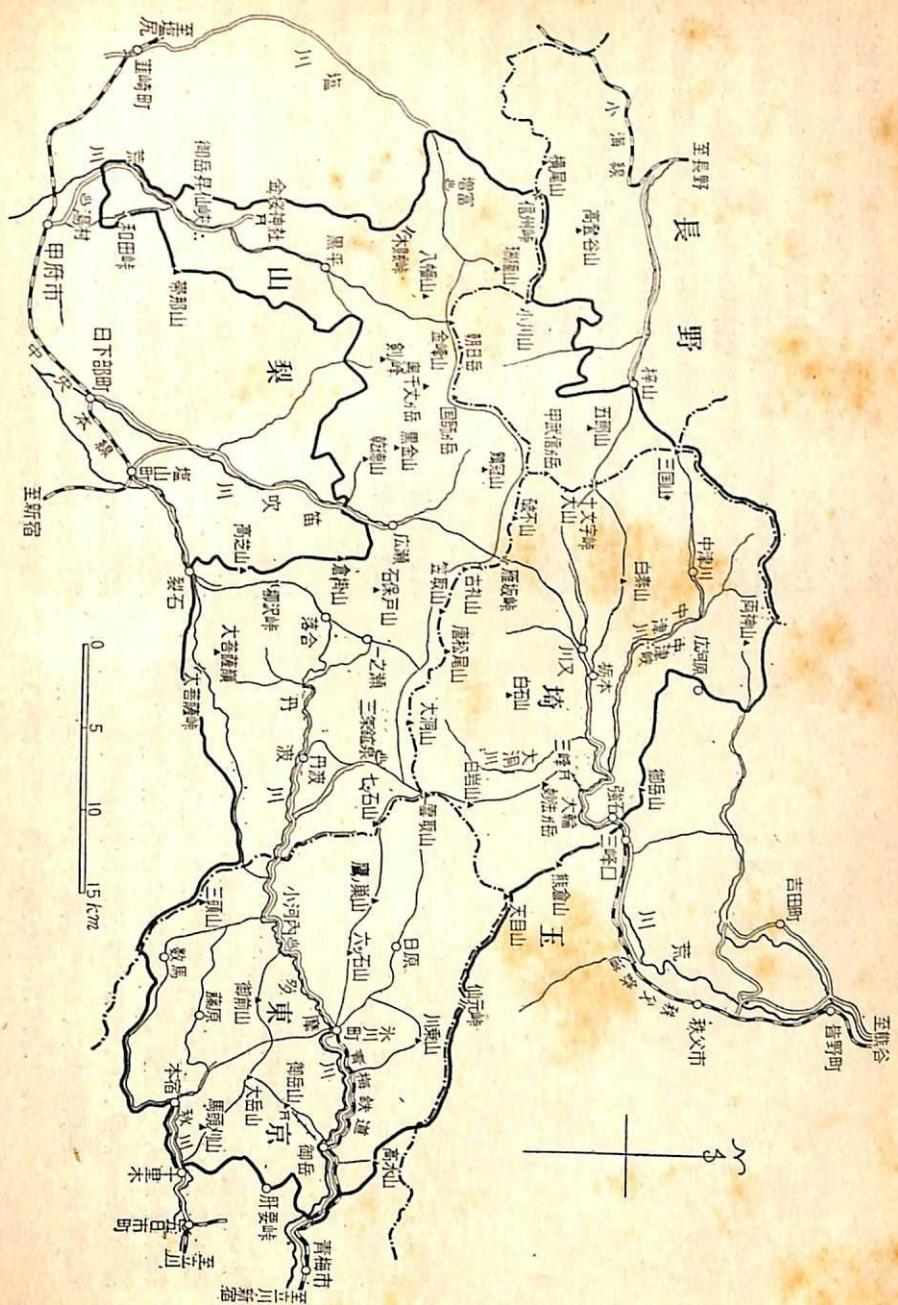
志賀高原の開発は長野電鉄の社長神津藤平氏といつて差支えないであろうが、同氏がはじめて今志賀高原にはいつたのは大正二年のことであり、丸池附近六十万坪を平穂村から借り受けて開発の第一歩を踏み出したのは大正四年のことである。志賀高原に近い発哺温泉の開拓も僅か百五十年前に遡る程であり、発哺の名は嘉永元年佐久間象山の命名といわれている。熊の湯も佐久間象

山の発見で同じく嘉永年間のことすぎない。

既に百六十名を越える遭難者を出した谷川連峰は、今では青少年の憧れの岩峰で夥しい登山者であるが、この隆盛は上越線が開通した昭和六年以来のことすぎない。現在でも谷川連峰、草津白根、苗場等に囲まれた中心部の一帯は文字通り人跡未踏の原始境である。このように考えてくると上信越高原国立公園は全く新しい感覚の国立公園で、今後の利用が刮目されよう。

秩父多摩国立公園

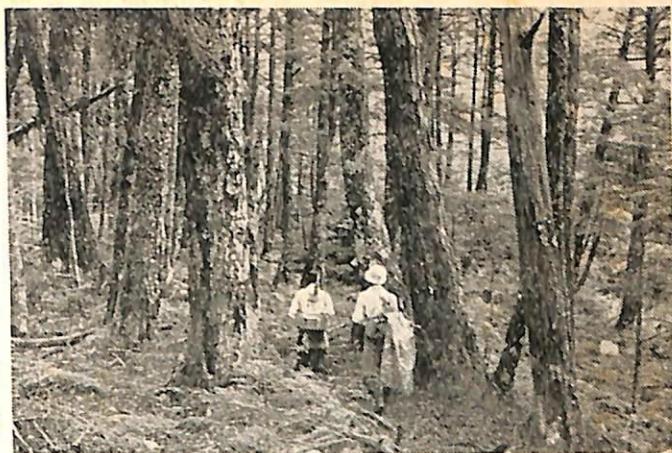
指定 昭和25(1950)年7月10日
面積 121,600陌



この国立公園は関東地方西辺の構造山地の一帯で埼玉、東京、長野、山梨の一部三県に跨る。金峯・甲武信、雲取とつづく山稜を尾根として雨は三分され笛吹川、荒川、千曲川となり夫々駿河湾、東京湾、日本海に注ぐ源流地帯である。この一帯は関東山塊という水成岩と深成岩との侵蝕山塊で、金峯山・朝日岳・甲武信岳等二〇〇〇米を超える山々が二〇以上も含まれているにかかわらず、火山が一つも見られないと言ふ、火山国日本には珍らしい地域である。中心部にあたる金峯・甲武信一带の山頂は花崗岩・閃綠岩等であるが、山体の主要部分は二疊紀から石炭紀を代表する秩父古生層として著名な中津川層群及び中生時代のジュラ紀—三疊紀を代表する大滝層群、並に白堊紀と考えられる甲武信層群、川糞層群、笛野層群等地学上重要な標準層で被われている。従つて吉野熊野国立公園の山岳部を除いては、他の国立公園と全く型式を異にした水成岩の山地である。荒川・多摩川・千曲川・笛吹川等がこの山塊を侵蝕して溪谷をうがち、早壯年期の地貌を呈している。山地を被る森林植生は核心部では山頂まで原始景観を残しており、野生動物も多く、森林の中で若を踏む深山の景趣はこの国立公園独特のものである。

森林は古生層の地質に加えて温暖適潤な気候に恵まれ、壯年期の急峻な地形にもかかわらず、地味が肥沃で保水排水の関係が良好なために、中心部には原生林が繁茂している。しかも標高が二、〇〇〇米を超えるので暖帶から温帶、更に亜寒帯に及ぶ植生の垂直分布が明瞭である。金峯の山頂部にはハイマツやお花畑が僅か

に見られるが、他の山の頂上部はコメツガ・アオモリトドマツ・シラベ・トウヒ・ヒメコマツ・カラマツ等の針葉樹で被われ、殊に十文字峠附近のコメツガの純林は美しい。コメツガやアオトドの森林はサルオガセや地衣類をまとい、枯損木をまぜて深山の景趣をたかめている。広葉樹はのぼるに従つてダケカンバ・コミニカエデ・ナツツバキ・ナナカマド等小喬木から次第に灌木となつて混生するが、一、八〇〇米以上の森林帯では広葉樹は矮小の灌木性のものになり、針葉樹林下に咲くシャクナゲの美は六月中旬の山をかざつて探勝者の目をたのしませる。二、〇〇〇米から一、五〇〇米の間は針葉樹の中に前述したカンバ類、ナナカマド・カツラ等の広葉樹を加えた針広混交林が繁茂し、山頂部の針葉樹林と共に菌類・蘚苔類の生育が旺盛で、原始的な秩父独特の森林美を呈している。一、五〇〇から八〇〇の間はブナをはじめシオジ・カツラ・トチ・ホオノキ・ミズナラ・カエデ類・シデ類等の広葉樹林で被われ、それにつづく低部の溪流聚落地帯はナラ・ケヤキ・クリ・イヌブナ・オニグルミ等の広葉樹林とスギ・ヒノキ等の人工林に占められている。植物景観を一口に云うとよく繁茂していると云うことで、地上といわず空中といわす水分が多いため樹木の枝には何處へ行つてもサルオガセがぶら下り、岩や木の幹には地衣や若の類がついている。従つて前記十文字峠のようにコメツガの原生林地帯では殆んど上草がなくなつてコケ類・シダ類と共に厚く敷きつめられた針葉樹の落葉は、歩くたびにスプリングのきいたマットのようである。これが森林の公園、若の国立公園と



白岩山附近の原始林 三峯から雲取山への縦走路中、白岩山の登りはかなり急峻であるが、頂上近くの針葉樹の原始林帯に入ると地衣類をまとい、サルオガセを下げたコメツガの林をくぐり、冷たい苔を踏む奥秩父獨得の神秘境になる。これは秩父古生層の肥沃な土壌と湿润な気象の恩恵である。

り、日本を代表する一つの風景形式を示している。
この国立公園特有の山塊を構成する基岩は、原生代と考えられる三波川系の各種結晶片岩と、秩父系より古い御荷鉢系千枚岩類

と、秩父古生層の硅岩・角岩・石灰岩・輝緑凝灰岩・硬砂岩・粘板岩等であつて、石灰岩は各所に岩脈となつて挿在している。更に大滝層群が各所に分布し柄本層・川又層・豆焼沢層・釣橋小屋層・古礼層等にわかれ、粘板岩・砂岩・頁岩・礫岩・石灰岩・角岩・綠色岩・千枚岩等から成つてゐる。秩父古生層には性質の異なる岩石が色々含まれてゐるだけに岩石の異なるに従つて山の景色も異なつてゐる。硅岩や角岩の山になると急に谷が狭くなり、川の両岸が絶壁をなして支那の北画を見るような景色が見られ、石灰岩は一般に鐘乳洞のような特殊地形を造つてゐる。また奥秩父の南西部には花崗岩の大侵入が金峯山として算えている。甲州産の水晶はこの花崗中のベグマタイト岩脈中に産するものである。また甲武国境一帯には、石英閃綠岩の大侵入がありその多くは花崗岩によく似た花崗閃綠岩となつて被風山から国師岳への異った景観を現わしている。これらのほかに甲武信岳・古礼山・昇仙峠・大菩薩嶺等には花崗岩類・玢岩・蛇紋岩等の火成岩の分布がみられる。

この公園の特色はいうまでもなく山岳と溪流であるが、その代表的なものとして前記の金峯山（二、五九五米）があげられる。山体は花崗岩で構成され、アオトド・シラベ・ハイマツ・キバナシャクナゲ・コメバツガザクラ・ガンコウラン・コケモモ等が豊富であり、カモシカ・サル等の野生動物もすくなくない。
金峯山につづく朝日岳（二、五八一米）国師岳（二、五九一米）一帯もコメツガの森林で被われ、カモシカも棲息する。

甲武信岳（二、四八三メ）は信州側の千曲川、甲斐側の笛吹川、武藏側の荒川を分ける位置にあり、シラベ・トウヒ・ヒメコマツ・サビバナナカマド・ハコネコメツツジなどが生育している。

雲取山（二、〇一八メ）は東京・山梨・埼玉の県境にまたがり、中生代の大瀧層群が主体で、コメツガ・カラマツ・カンバ類等の森林で被われている。

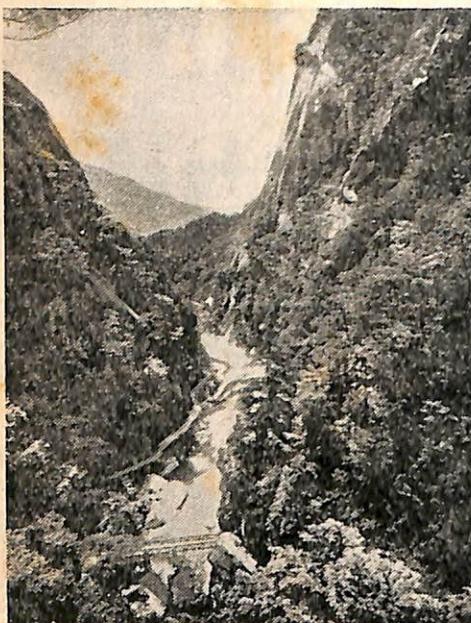
両神山（一、七二四メ）は区域の北端にあつて古生層の硅岩から成り、五〇米を超える断崖が山頂に発達している。動植物が豊富であるが、殊に昭和二四年に発光キノコバエが発見され、我国の発光生物に新種を加えた。

大菩薩嶺（二、〇五七メ）は両神山の南方で花崗岩類からなり、クマ・シカなどの野生動物が棲息している。

多摩川の上流は丹波川で一帯は山梨県にあり乍ら東京都の水源林でツガ・モミ・ナラ・カエデ類の天然林にカラマツの植栽林をまぜ、古生層の硅岩・石灰岩・粘板岩・硬砂岩の互層の間を流れる清流である。水源地一帯の森林はよく保存され、サル・クマ・カモシカなどの野生動物が棲息している。

秋川の渓谷は多摩川の支流で他の渓谷程の深みはないが、荒川の上流は秩父古生層の中津川層群が発達し、硅岩・角岩・石灰岩・輝緑凝灰岩・硬砂岩等の間を穿つて中津峠となり、植生もコメツガを中心とする天然林だけに奥秩父の特色がある。

奥多摩の渓谷と共にこの国立公園で一番著名な渓谷は昇仙峡である。笛吹川の支流荒川の一部で花崗岩の方状節理が明瞭であり、岩壁の高さは約一〇〇メに及び、アカマツを主木とする植生に、カエデ類・ツツジ類等が混生する美しい渓流である。この国立公園の温泉にはみるべきものがないが、ただ増富温泉（海拔一、〇六〇メ）はラジウムエマナチオンの含有量（一一、〇〇〇マッ）が世界有数の放射能泉である点で著名である。この温泉は花崗岩地帯から湧出し、泉温二十五—三五度の芒硝土類硫酸含有食塩泉である。



昇仙峡 笛吹川の支流荒川の一部で、花崗岩の方状節理が発達したところである。岩壁の高いものは100メにも達し、アカマツを主木とする植生に、カエデ類・ツツジ類等が混生する水の美しい峡谷である。新緑・紅葉の頃は特に美しい。

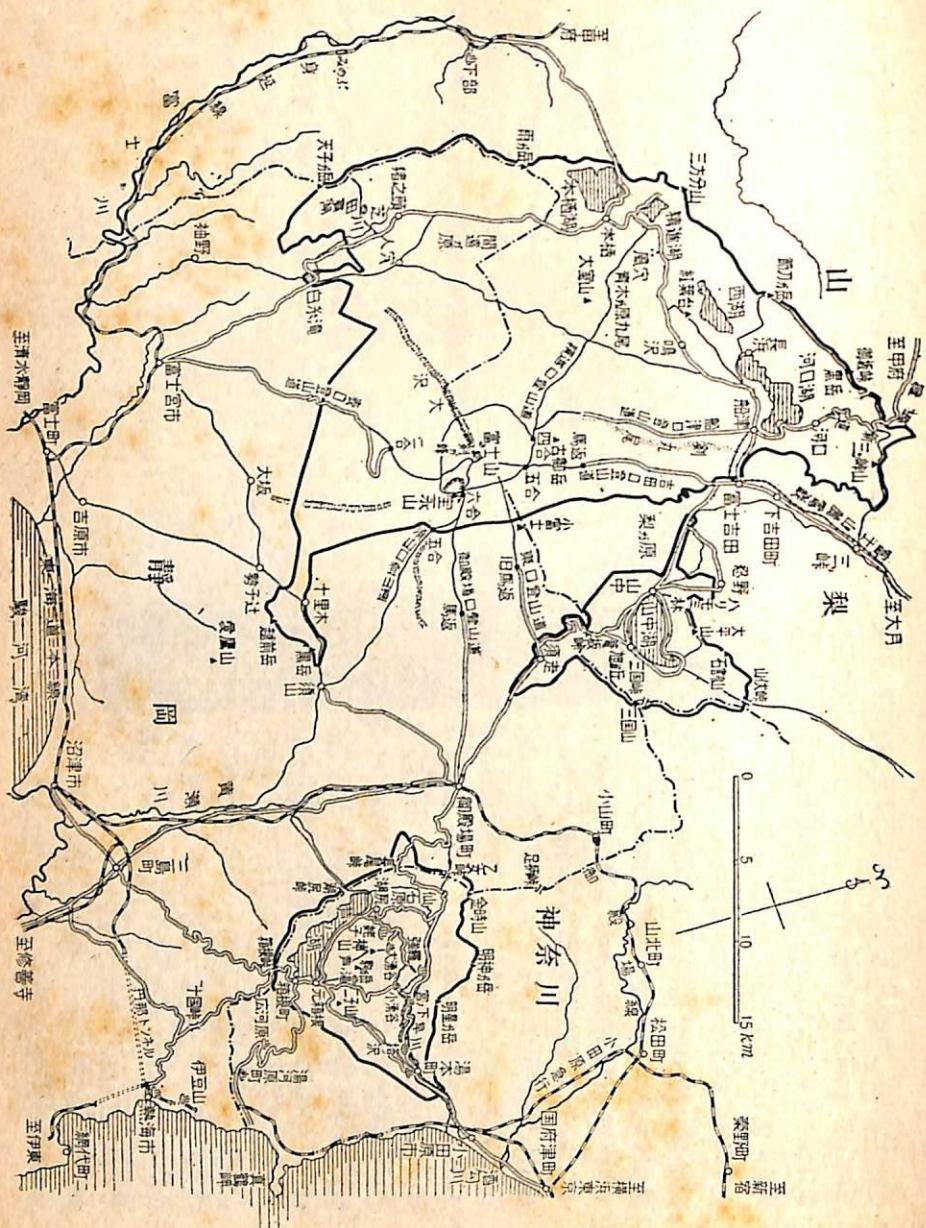
秩父多摩の国立公園で一番特色のある郷土景観は山村の部落である。谷をきざむ秩父の山の斜面には渓谷という程のけわしさはないが、耕作地としてはとても困難な斜面である。でも秩父の各谷の農家部落はこの斜面に居をかまえ急斜した山肌をひらいて耕作している。普通考えられる平らな耕地といふのはこの国立公園の中にはない。たまに川岸に平らな耕地を見出すと珍しさと落着きとを痛感する程である。山腹につくられた農家の郷土色豊かなカヤ葺の大きな建築には夫々地方的な特色があり、多摩川筋や秋川筋に発達している。秋川はよく東京都のチベットといわれるが、上流の典型的なカブト棟の大きな富士型の民家は興味が深い。荒川筋に添う最も奥の柄木の部落は今でも美しい山村聚落を呈している。荒川の谷底から百五十米の高地に位置し、海拔七百五十米である。現在戸数は六十戸で人口三百七十余の大きな部落である。屋根に並ぶ石ころが山奥の味を漂わせている。明治の終頃までは附近一帯は深い原始林で囲まれ、山中には猪・猿・鹿・熊などが棲息し、殊に猪は秋の稔のとき作物を荒したので、毎晩不眠である。猪追が部落の一番大事な仕事であつた。子連れの猪の群れにでも荒されたら急斜面に春から營々と注いだ苦勞が一夜で水泡になつてしまふのである。熊も秋には人家の附近まで出て来たが昨今ではほとんどみられなくなり、獵師が多くくるのは鹿だけで、谷の向うが紅葉する頃になると鹿の悲しそうな鳴声が二声三声きこえてくる位になつた。とはいへ秩父多摩の山村には今尚昔ながらの生活の味がこされてゐるが、これと対比して奥

多摩の小河内村には氷川町との境附近に現在の状態で世界で五番目の大きなダムの工事が進行している。この小河内のダムは東京都の貯水池で発電にも利用される予定であるが、完成の暁には周囲三六・六糠に及ぶ人工湖が出来、水面は遠く鶴沢まで達する。ダムの高さは一四九米、上端の長さ三四五米、幅九米のコンクリート堰堤で、容積一、六〇一、八〇〇立米、丸ビルの約七倍に達する膨大なものである。国立公園の区域内に景観に著しい変化を与えるこの種の人工施設は許容されないのが原則であるが、ここは一つの特例といえよう。この公園で著名な神社は三峯神社と御岳神社である。

三峯神社は、伊弉諾命、伊弉册命を祭神とし景行天皇の四一年(約一、八三五年前)の創立と云はれている。御岳神社は、櫛真知命、大己貴命・少彦名命の三神を祭神とし、奥院には日本武尊を祀つてあり崇神天皇の七年の創立と云われている。二つの神社とも日本武尊の御東征の際仮宮の地として伝えられており、そのとき山中の難路を御先導申上げた狼を神社の御眷属としており、一名「おいぬさま」と云はれ火除、盜難除等厄除の「おふだ」としてこの地方の農家の軒先等に見られる。神社で狼を御眷属としているところは秩父を中心としたこの地方に限られているようである。

指定 昭和 11(1936) 年 2 月 1 日
拡張 昭和 13(1938) 年 12 月 17 日
面積 71,757 陌

富士箱根国立公園



この国立公園は山梨、静岡、神奈川の三県に跨り、名実共に世界一を誇る典型的なコニーデの富士山を中心とする富士団地と多數の温泉を含む標式的な複式火山の箱根団地とから成つてゐる。この両者は共に富士火山帯に属しているが、その構造や地貌は両者全く趣を異にしている。それは前者が単純なコニーデであるのに対し、後者はカルデラ・コニーデ・トロイデ等の複雑な台成型であり、湖沼が富士五湖は堰止湖であるのに対し、芦の湖はカルデラ内の火口原湖であるなどの点である。又後者には多数の温泉が伴うのに対し、前者には明瞭な温泉は見られないことも相異点である。

富士団地

ここは秀峰富士を中心とし、山麓の雄大な裾野に富士五湖の珠玉をちりばめた勝景の地域で、三ツ峠・御坂山塊・パンラマ台・天子ヶ岳・越前岳等の好展望地点を四周に配する。富士の山腹を被う植生には顕著な垂直的分布が観察され、北西部の青木ヶ原の樹海や忍野の針櫻純林や躑躅が原のレンゲツツジの群落などが特徴のある植生を示し、高山植物も卓越している。又山腹には随所に胎内・氷穴・熔岩樹型等熔岩流に関する興味深いものが多い。

これら的主要な自然景觀は次の通りである。

(1) 富士山—山容は錐状火山(コニーデ)の全く標準型であるが、噴出物の堆積型からいえば成層火山である。

この世界一を誇る單一コニーデは唯一回の噴出で出来たのではなく、三段階として考えられる。何れも日本列島中央弧を東西に

二分するフオツサマグナ(大地溝帯)に沿う火山活動に伴うものであるが、最も古い第一段階の小御岳の出現は、南方の愛鷹火山と同時代と考えられている。これは吉田登山道五合目小御岳神社附近(海拔約二、三五〇米)を最上部とするアスピーテ火山のようである。第二段階は現在の富士山の前身とも云うべき古富士火山で、中心部も現在のものとあまり離れていなかつたらしい成層火山である。宝永山頂の東側にこの噴出物が見られるので、古富士の頂上は少くとも海拔二、七〇〇米級と考えられる。その後第三段階として新期熔岩が略同一の地点から噴出を繰り返して現在のような高峻端正な姿を構成したのである。山頂は現在八峰が旧火口を囲り、南西隅には最高峰劍ヶ峰(三、七七六メートル)、北西隅に白山岳、北東隅には久須志岳・大日岳・伊豆岳・南東隅には成就ヶ岳・駒ヶ岳・三島岳が聳えている。旧火口は直径東西五二〇メートル、南北五四〇メートルで火口底は劍ヶ峰から二二二メートルの深さである。約千年前迄は此の中に熱湯を湛えていたという記録があるが、今では全く涸渇して火口壁の崩壊による崖壁が見られる。然し火口の北東伊豆岳と南東の成就岳との中間外側に、砂礫の中から蒸氣を発散している所がある。富士には宝永山・大室山・長尾山等六〇余りの側火山(寄生火山)が見られるが、海拔約二、五〇〇メートル以上にあるものは主として噴火口又は噴火跡のみで代表される寄生火山であり、それ以下のものは多少の山を形造るものが多く、しかも山麓に近いほど大きいものがある。北西麓の大室山は最大の寄生丘であり、その上方(長

尾山・片蓋山・白山・大平山・奥庭・御庭と順次小さくなつてゐる。熔岩を主として噴出した最も新しい寄生火山は精進登山口一合目にある長尾山で貞觀六年(八六四)に現在の青木ヶ原に広く分布する多量の熔岩を噴出し、

当時まであつたセの海と云う淡水湖を埋めて現在の西湖と精進湖とに二分し、本栖湖の一部分をも埋めた。火山砂礫を主とした最も新しい爆発は宝永四年(一七〇七)

で、海拔三、一〇〇米～二、五〇〇

米の富士山南東側を深く抉つた火口を生じた。これ等寄生火山の熔岩・火山弾・砂礫等はその噴出の場所及び時代によつて多少岩質を異にしているが、大体の噴出物と同じく、殆んどすべて玄武岩の種類である。唯玄武岩と著しく異なる唯一の岩石として特に注目されるものに、宝永火口から玄武岩質した酸性安山岩である。これは石英安山岩の一種であるが、このような酸性の熔岩が軽石や黒曜石として噴出したことは、富士山としては他に例のない珍らし



富士山 三島附近から眺めた富士の南東斜面で、中央に大きく口を4開いているのが富士山のヘソと呼ばれる寶永火口である。これは宝永一年(1707)の爆裂で深く抉ぐられた傷跡であるが、山容を割するコニーの美しい線は富士独得の景観である。

い現象で、宝永噴火が他の寄生火山の噴火と全く異なる大爆裂であつたことを示しているようである。兎に角富士山の噴出物の大部分は玄武岩質の甚だ流動性に富んだものであつたために、山頂近くの急傾斜部には殆んどその形跡を留めないで、主として裾野に近い緩傾斜部に廣く且つ厚く堆積して、熔岩流全体の形が狐の尻尾のようになくなつてゐるので、富士地方の方言では此の新規熔岩流をまるひ(丸尾)と呼んでいる。これに属するものに鰐丸尾(吉田町の上暮地に達するもの)雀穴丸尾・檜丸尾・鷹丸尾(山中湖の西を掠めて忍野盆地に達するもの)等有史以前に噴出したらしいものと、有史後に噴出した前記の青木ヶ原熔岩流があるが、後者は銀杏の葉のよう拡がつてゐるので丸尾とは呼ばれていない。これ等の外に富士地方に特色のある地貌は、風穴・氷穴・胎内等と呼ばれてゐる洞穴の存在と、熔岩による木材の仮像又は鉢型とも見られる樹型の砂礫及び火山弾に先立つて噴出した酸性安山岩である。これは石英安山岩の一種であるが、このよ

存在である。所謂風穴には二型式あつて、其の一つは熔岩鐘乳と熔